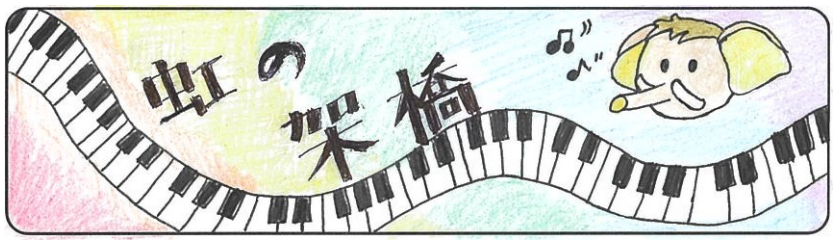
虹の架橋は足利屋・さくらもーるアスクが毎月１日発行する地域新聞です。



第３１９号

令和４年３月１日発行
企画・編集　松﨑　靖
発行　㈱足利屋洋品店
みどり市大間々町4-1380（〒376-0101）
TEL 0277－73－1212
Fax 0277－70－1066

今月の題字
高橋なるみ先生.根岸彩夏先生
（大間々高校教諭）

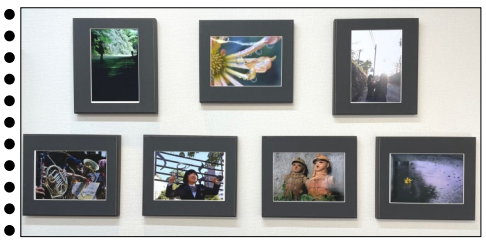
大間々高校写真部顧問の高橋先生が文字と色付けを、地域連携担当の根岸先生がみどモスと鍵盤の絵を描いてくれました。「街中ふれあい作品展」のお陰で嬉しいご縁が深まりました。

街中ふれあい作品展
三月一日から十四日まで

みどり市内の障がい者と大間々高校と大間々商店街による共生型のアート作品展が、足利屋、朝賀米穀店、おぎぜん雛人形店、蔵人新宇、岡直三郎商店、坂下製材、赤城興産セルフ大間々ＳＳ、街かどカフェにっこにっこなどで開催されます。

足利屋のミニギャラリーでは、にっこにっこファクトリーのパネル『私たちの思いを聞いてほしい』、チアフルの『とらどし』、パステルの『電車に乗りたいな』、はなはなの『寅娘』を展示。大間々高校写真部の作品も七点を展示いたします。大間々高校写真部は第二十六回群馬県高校芸術祭高校生写真展で最優秀賞を受賞し、全国大会に進出したほか、第二十七回関東地区高等学校写真展で審査員特別賞を受賞するなど、レベルの高さが多方面で高く評価されています。是非ご覧下さい。

『私たちの思いを聞いてほしい』



小耳にはさんだ いい話
（文責・靖）《319》

大間々町の西條久江さんは、第十六回国民文化祭書道部門で文部大臣奨励賞を受賞し、大間々町ボランティア連絡協議会会長や大間々町文化協会理事などを歴任した文化人で、『風人』という短歌結社の隔月誌も楽しみに読ませていただきました。その西條さんが令和三年度群馬県文学賞（短歌部門）を受賞しました。受賞作品は『車に乗せむ』と題する三十篇の短歌で、ご主人との最期の別れの心情や若き日の思い出が三十一文字に凝縮され、読む人の心に深く沁み入る歌ばかりでした。

夫がくれたご褒美

面会の叶はぬならば六十年ぶり
にしたたむ夫への手紙

玻璃越しに君との面会許されて
マスクの下にうすく紅差す

きみが手にそっと触れたる遠き日よ
硝子を間に手と手を合はす

皺深きわが手をとりて四日前
「苦労かけた」と夫言ひくれし

突然にその時の来ぬ真夜中に
電話のベルの高鳴りつづく

きみ背負ひふるさと歩く昨夜
のゆめ車に乗せむ明日は納骨

八十七年生きし証しの診察券
五枚六枚捨て難くあり

新盆の夕ぐるるとき突然に
窓に入りくる精霊バッタ

思ひ出の中に赤城を埋めおく
覚満淵を歩きし夏の日

約束は一番電車山頂に
れんげつつじが炎と燃えし

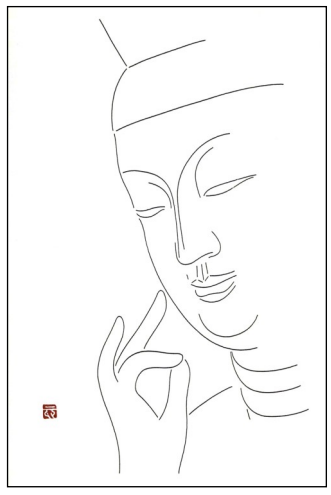
遅咲きの桜咲くころまた来むか
谷川連峰遠く真白し

ご主人の幸雄さんがお元気だった頃、ご自宅に近い「さくらもーる」でよくお会いし、笑顔で声をかけてくださった姿が思い出されます。

久江さんは、地元新聞の取材に「受賞は夫がくれたご褒美かな」と答えていました。とても羨ましいご夫婦でした。

世界一小さな足利屋トイレ美術館

今月の絵《３１９》
武田仁さん『弥勒菩薩像』



仏画家の武田仁さんとは二十数年前に『志帥塾』という勉強会で出会って以来、交流を深めていました。０．６ミリの細い線で描くシンプルな絵に仏様への祈りが込められています。

武田仁さんは、高僧・松原泰道老師に二十五年間師事し、松原老師の言葉と仁さんの仏画の合作カレンダーを毎年作り続けていました。

虹の架橋十五周年の時、足利屋で仁さんの仏画展と講演会を開いたことが思い出されます。桜が散った日に逝った仁さんを偲び、広隆寺の弥勒菩薩半跏像を展示させていただきます。

靖ちゃん日記

令和四年二月十九日（土）

今日から大間々博物館コノドント館で始まった企画展「なつかしの昭和三十年代」を観に行った。あの当時のテレビや電気釜を見ているうちに、昔のことが蘇ってきた。昭和三十年代は、自分の年と重ね合わせると、三歳から小学校卒業までの十年。我家には、電話もテレビも車もなかった。電話は隣の東群運送で借り、テレビは近所の鰻屋で相撲や赤胴鈴之助を観た。父が仕入れに行く時は、スクーターの後ろに乗せてもらった。竈で炊いたご飯に味噌をつけた、おばあちゃんのおにぎりがうまかった。庭で薪を割り、その薪を竈や風呂にくべて煮炊きをしたり風呂に入った。あれから六十年。薪割りも竈もなくなり、指先ひとつでスマホで電話もテレビも映画も観られ、買物もできる。今は、「かまど」と言えば、鬼滅の刃の竈門炭次郎だが、あの頃は、「てなもんや三度笠」の藤田まことの「あんかけの時次郎」だった。

締切に追われて逃げて二月尽

毎月、虹の架橋の編集作業に追われながら二十数年が過ぎました。締切に追われるプレッシャーを感じながらも続けていられるのは、出来上がった時の達成感と家族や読者の方々の温かい眼差しのお陰だと思っています。

「一月往ぬる、二月逃げる、三月去る」と言われる通り、月日の経つのは早いものです。もしかしたら人生という時間も、いつやって来るかわからない締切りに向かって歩いているのかもしれません。

「やっておけばよかった」ではなく「やっておいてよかった」と思える人生でありたいと思います。

虹の架橋 ⇑ 検索 で、インターネットからでもご覧いただけます。

第三百二十号は令和四年四月一日（金）発行予定です。

❤やっちゃんの似顔絵提供：ひさかさん